

II. 文献レポート

1. C. Samuel Storms, *Healing and Holiness: A Biblical Response to the Faith-Healing Phenomenon* (New Jersey: Presbyterian and Reformed Publishing Company, 1990)

A. 著者(1951-)は、ホイートンカレッジで神学を教えたこともあったが、2004年から、カンザスシティにある Enjoying God Ministries 団体の総裁となっている。ダラス神学校でディスペンセーション神学を学ぶが、カルヴィニストになり、1993年にはヴィンヤードの教会牧師・教師となった。本書は、このような著者の信仰的神学的変化の中で書かれたことになる。組織神学者、ジョナサン・エドワーズの研究者でもある。著者の神学理解とその変遷については、*Convergence: Spiritual Journeys of a Charismatic Calvinist* (Greenwood, Missouri: Oasis House, 2008) や Wayne A. Grudem (ed.) の *Are Miraculous Gifts for Today?: Four Views* (Grand Rapids: Zondervan, 1996) などが参考になる。

B. 本書は、副題にもあるように、当時の北米キリスト教界を席卷していた癒しの運動の主張や現象に対する聖書的神学的分析と評価をコンパクトにまとめたものである。全体的には、福音主義的カルヴィニストとしての応答になっている。「前書き」を書いている J.I. パッカーも、癒しの諸問題に関して、本書は聖書的で健全な書であると推奨している。内容的には、単に身体的な

「Healing」だけでなく、全人格的な癒しを考えている(「Holiness」が大切)。また、癒しの運動の問題とともに、癒しに関わる重要な神学的課題(例えば、神の不変性、癒しと幸福、癒しと信仰、信仰と医療、からだと心、サタン・罪・苦しみ、神義論など)が、関係する聖書箇所解釈と適用(例えば、イザヤ 53: 4-5; マタイ 8: 17; 1 ペテロ 2: 24; ヨハネ 14: 12; ヤコブ 5: 14-15; 2 コリント 12: 7 以下; ローマ 8: 28 など。また御子の癒し、使徒の働きにおける癒し、手紙における癒し)に基づいて注意深く論じられている。

C. 特に教えられた三つのことを簡単にまとめておきたい。第一は、「神の不変性」の問題についてである。今日的な奇跡や癒しを強調するときに、しばしばヘブル 13 章 8 節が引用される。しかし著者は、神の本性的不変性と、神

のみ業の多様性とを区別する。つまり、私たちの神は不変のお方であるが、ご自身を私たちにあらわされる方法やみ業はいつも同じであるとは限らない。第二は、癒しにおける信仰の役割についてである(第 8 章)。興味深いことは、御子の癒しの出来事における信仰(救いのための信仰のことではない)の役割に多様性がある、しばしば強調される「信じて癒される」ことは、御子の癒し物語において絶対的規範になっているとは限らない、ということである。こうして、癒しの運動における「信仰」とその役割の絶対化に対しては疑問を投げかけている。第三は、苦しみにおける神とサタンの協働の意味についてである。神義論の問題とも関係してくるが、「パウロの肉体のとげ」について論じる中で(第 11 章)、著者は、「神とサタンが同じ出来事が起こることを願っていても、それを通して、全く異なる結果を望んでいることも覚えなければならない」と述べている。十字架の出来事も、パウロのとげもそうである。

D. 二つの問題を指摘しておきたい。第一は、「カリスマ運動」の定義についてである。第 1 章の注 1 で、著者は「charismatic movement, charismatics (カリスマ運動、カリスマ派)」の定義の問題に一応触れているが、それでもなお不十分であろう。カリスマ運動、カリスマ派と言ってもあまりにも多様で幅広いからである(ペンテコステ派や第三の波も含めて「カリスマ派」と言われている場合もある)。問題として引用されている「カリスマ派、癒しの運動家」の多くは、むしろ「新」カリスマ派に属しており、ペンテコステ派でも、従来のカリスマ派でもないと言っておいたほうがよいだろう(この理解は、Michael Moriarty の *The New Charismatics* [Grand Rapids: Zondervan, 1992] に従っている)。第二は、イザヤ 53 章(マタイ 8: 17; 1 ペテロ 2: 24)の解釈についてである。著者は、この解釈問題を注意深く取り扱っていて有益であるが、ただひとつだけ指摘させていただきたい。マタイが、御子の癒しの業に注目して、これをイザヤ 53 章の成就としている以上、後者の「病を負い、・・・痛みをになった」を換喩表現(metonymy: つまり、原因である「罪」と言う代わりに、罪の結果のひとつである「病」を比喩的に表現している)としてだけ解釈して片付けることには無理があるのではないか。むしろ、文脈的に、罪の贖いが中心であることは明らかであるが(したがって、罪の赦しと病気の癒しを同等に並置することに問題がある)、メシヤの「救い」には、様々な問題や困難から

の救いも同時に含まれており、この箇所をそのまま文字通りに理解することもできるのではないか（メシヤの救いの広がりとは多様性については、ルカ 4：16－21 も参考になる）。

E. 聖書の取り扱いに関して、非常に注意深く、その解釈は信頼できる。議論も思慮深く丁寧、しかも限られたスペースの中にコンパクトにまとめられ有益な議論が多い。どの神学的立場にあっても、病氣と癒しに関してまず読んでおきたい著作のひとつである。

2. Jean-Claude Larchet, *The Theology of Illness*, John and Michael Breck, trans. (NY: ST Vladimir's Seminary Press, 2002)

A. 著者（1949－）は、ギリシャ正教のいわゆる教職ではないが、フランスのストラスブールにある学校の哲学教授であり、特に教父学の専門家でもある。また、ギリシャ教父に関わる、霊性神学や病氣・癒しなどに関係する著作が多い。

B. 「病氣」そのものについて一番重要で知りたいところを神学的に取り扱っている書である。筆者自身も、このような著作を探し求めている中で見つけた稀有な書のひとつである。本書のアプローチは、福音主義の通常のやり方と同じではない。また内容も（使用されている用語も含めて）、基本的にはギリシャ正教徒のために準備されたものと言える。しかしそれでも、本書は、他の書にない、病氣についての本格的な取り組みが含まれており、「病氣の神学」を求めている者たちには大いに参考になる。神学的哲学的な表現や議論もあるが、それでも全体的には一般読者のために専門用語の羅列を避け読みやすいものになっている。原書（フランス語）は 1991 年に、英訳は 2002 年に出版されている。病氣とそれに関係した諸課題を網羅している著作ではないが、神学的霊的にも、実際のにも最も重要な課題（病氣の起源と意味、また癒しの意味など）について、現代医学の問題や限界を意識しながら、聖書とギリシャ教父の知恵に基づいて議論を積み上げている。

C. 第 1 章の病氣の起源（The Origins of Illness）では、私たち人間が死か不死かではなく、両方の可能性をもった存在として創造されたことを確認すると

ともに、病氣の起源の理由を分かりやすくまとめていく（神が病氣、死を創造されたのではなく、病氣は罪から来ている）。第 2 章の病氣の霊的意味（The Spiritual Meaning of Illness）では、健康がすべてにおいて善であるとは限らないし、病氣がすべてにおいて悪ではないと前置きしながら、病氣における神の御心や目的を明らかにする。消極的なことばかりではない。神は、魂の健康のために病氣を許されることもある。墮落の結果であった病氣が、その人の魂の救いの道具にもなる。また病の中で祈りの重要性を確認している。とにかく、聖書と教父たちの知恵と経験に基づきながら、聖書的に神学的に病氣についての、健全な病氣の神学を求めている。神学的な取り扱いをしようとすればするほど、病氣に関しても、思索的な論究のみに終わってしまうことが多いが、本書は同時に、神にある霊的なあり方や霊的成長を念頭に置きながら病氣について考えていると言える（ギリシャ正教の神学が「霊性神学」と呼ばれる所以でもある）。第 3 章の癒し（Christian Paths toward Healing）では、現代の医療の限界が明らかにされているが、しかしまた、どんな世俗的治療法（癒しの方法もまとめて列挙されている）も神のものであり、神が、それらを通して癒しの業をなさることが強調されている。最後に、注目したことから一例を挙げておきたい。著者は、彼の基本的スタンスでもあるが、現代の医療とその根底にある現代文化がもつ非人格化の問題を問いながら、病氣、苦しみ、治療、健康について再考し、あくまでも神との交わりの中でこれらの問題を扱おうとしている。

「この世界において完全な健康は、絶対的な形では存在していない。健康はいつも部分的で一時的な均衡のことである。……理想的な健康の概念は、私たちの理解を超えたものである（53 頁）」。

D. 第一に、ギリシャ教父（ギリシャ教父だけでなく）の引用が多く、彼らの知恵が聖書のように（同等に？）扱われていることが気になる。また聖書を聖書で解釈するというよりも、聖書を教父の知恵で解釈しているように見えるところもある。筆者としては、聖書解釈や教父たちからの引用についても、更に注意深い精査を求めたいところである。第二に、当然のことながら、ギリシャ正教の霊性神学の流れにあることを心に留めつつ、本書を読む必要がある。またギリシャ正教独特の神学表現がいくつか含まれているので確認しておきたい。「deification：神化（神になるというよりも、実際には、聖化に近い意味）」。

「divine energies: 神的エネルギー (神ご自身の本質そのものではないが、そこから被造物に対して注がれている栄光の光、神的恵み・力・業・意志などが含まれる)」、「uncreated grace: 非創造の恵み (創造前からすでにあった神的エネルギーを指す)」。

E. 「病気の神学」に関する、有益で稀有な書として本書をお薦めしたい。

3. パウル・トゥルニエ、赤星進訳 『聖書と医学: ある医師の臨床体験の中から』 (聖文舎、1970年)

A. 著者 (1898-1986) は、日本語に訳されているものだけでも 17 冊以上あって日本でもよく知られている。トゥルニエ自身をさらに知るためには、赤星進氏らによる『神学と精神医学の間: トゥルニエとの出会い』 第三集 (聖文舎、1985年) や Monroe Peaston, *Personal Living: An Introduction to Paul Tournier* (New York: Harper & Row, 1972) などが参考になる。両書には、トゥルニエの家庭的、神学的背景とともに、主な著作の解説がある。

B. クリスチャンの医療関係者に、これほど影響を与えてきた著作は他にないと言ってもよいかもしれない。原著の初版は 1951 年に出版されており、内容的には時代遅れになっている部分もあるだろう。また、体系的に整理されたものを提示しているわけではない。しかしながら、それでも多面的に「聖書と医学」について、聖書の教えや他の神学的医学的専門家たちの言葉、そして自らの体験を交えて分かりやすく解き明かし、現在でも、クリスチャンの医療関係者 (介護福祉者やカウンセラーも含めて) や牧会者に、ぜひとも読んでいただきたい著作である。

C. 本書の第一部の「聖書の見解」では、どんな病気でも二つの異なる次元の問題を含み、第一は科学的取り扱い (医療)、第二は霊的取り扱いが必要になることを指摘し、後者の重要性とその取り扱いには、「聞くこと、理解すること、愛すること、祈ること」が重視されている。また聖書がもつ知恵の素晴らしさを確認した上で、二元論ではなく、一元的な医療、真の科学と聖書の一致を強調する。こうして、医学、自然、物質的なこと、夢、性本能、毎日の出来事なども、二次的なこととして軽視してはいない。第二部「魔術の問題」で

は、魔術と信仰を峻別しながら、科学 (医学) の中でも魔術性があることを指摘する (神格化された医学)。「キリスト教医学」という言葉の中にも魔術がある。とにかく、このような魔術の誘惑はどこにでもあると述べる。しかしまた、魔術を恐れて大胆な行為を控えるところにも問題があると言っている。最後に、魔術的なものではなく、患者や医師にとって重要なことは、「人格的統合」であることを明らかにする。第三部「生命、死、病気、治療」では、医療に関わる重要課題の意味 (生命、死、病気、医師とその使命、罪と病気、苦難、治療、医学) について、聖書に基づき、また神学的医学的洞察を加えながら説明している。第四部「選択」では、医療関係者が何を第一にして医療行為をすべきか問うている。ここで、自身の「人格医学」を強調し、イエスキリストとの交わりを究極善として勧め、これもまた治癒力の源泉であると付け加えている。

D. 21 世紀に入り、生命倫理の分野だけでなく、その他の分野においても、聖書 (福音) と医学 (医療) 間の対話や交流 (またその学び) が、ますます必要になって来ていると感じているが、現実には、前世紀後半よりも少なくなってきたのではないかと危惧する面もある。そのような状況下で、筆者としては、トゥルニエをもう一度読み直し、批判も含めて再評価していく必要があるのではないかと考えている。上記のピーストン (Peaston) の著作にも、多くはないが、トゥルニエについての一般的批判が紹介されているので簡単に紹介しておきたい (第 10 章)。第一に、トゥルニエは、医学と治療の中に宗教的重要性を持ち込んでいる。第二に、治療方法に関して、現代の医療においては、患者と医者との関係は重視されるが、そのあり方は分離的なものである。しかしトゥルニエは、愛と理解をもって患者にインボルブしていくことを強調している。第三に、彼の著作には、体験的逸話が多く用いられている (客観的有効性の問題)。

E. 現在でも十分に益する内容が含まれていて、読みやすく教えられることの多い著作である。特に医療関係者や牧会者にお薦めしたい。

4. D. Martyn Lloyd-Jones, *Healing and the Scriptures* (Ontario: Oliver-Nelson Book, 1988)

A. 著者 (1899-1981) は、20 世紀の福音派リーダーのひとりであった。初めは外科医となって働いたが、のちに召命を受けて牧師となり、著名なキャンベル・モルガンの後を継いで、ウェストミンスター・チャペル (ロンドン) の牧師として奉仕を続けた (1939-68 年)。

B. 本書は、1953 年から 1974 年までの間に、彼が、医療関係者のために講演してきたものをまとめたものである。付録を含めて 11 の講演が含まれ、そのうちのあるものは、50 年以上前のものである。したがって、時間的にも空間的にも、現在の日本とはかけ離れた医療状況において語られたと言えるかもしれない。しかし、医療の著しい発展に伴う変化 (または危機) に直面する中で、ロイドジョーンズが、医療経験者として牧会者として語ったことに、現代のクリスチャンの医療関係者たち、また、病氣や様々な苦しみに直面している人々を導く牧会者たちが、耳を傾けるべき多くの示唆が含まれていると思われる。

C. 特に注目したことを挙げておきたい。著者は、第 2 章 (*The Supernatural in Medicine*) で、奇跡的な癒しの可能性について述べている。クリスチャンの医師は、「faith healing」をどのように考えるか。奇跡を否定する人々の三つの理由 (心理学的現象にすぎない。今は、自然の法則による閉ざされたシステムの中にいる。使徒の時代以降、奇跡はない) に対して、奇跡の例を挙げ反論する。また近年、これまでの科学的な見方が変化してきたことにも触れている (19 世紀以降の科学的思考の問題や限界)。ただし何でも信じるのではなく、注意深い吟味の必要を強調する (*「Open but Cautious」*)。特に教えられたのは、第 4 章 (*Will the Hospital Replace the Church?*) で、医療をつかさどる病院とそのシステムが発展していく中で、これからの病院と教会の関係について考えている。医療と教会は、ともに協働する必要がある。そして教会の働きは、人々を、神との関係の回復に導くこと、また病氣の症状ではなく、その奥にある問題を扱うものである。第 8 章 (*Fullest Care*) も重要である。医療の限界や不足を指摘している。病や苦しみ、不安のもとには、私たち人間が創造者から離れてしまったという問題がある。したがってキリスト教だけが、本当の意味で、全人的な扱い

をすることができる。教会は、医療の働きの一部分ではない。医療関係者のためにも働くことができる (愛、自己犠牲の働きのために)。延命だけではなく、永遠の備えをする必要がある。

D. ロイドジョーンズは、緻密な釈義に基づく聖書講解者として知られている。しかし本書は、聖書箇所引用と解説はあるものの、これまでの著者の経験や聖書理解に基づいて、クリスチャンの医療関係者たちに対して語られた講演集である。これらに一貫して流れているものは、医学の発展に伴い、様々な医療分野で起こっている変化と様々な問題について、クリスチャンの医療関係者 (牧会者たちも) に助言を与え、根本的指針を明らかにするものである。また、直接引用しているわけではないが、基本的には、トゥルニエの主張と類似していることが多い。もしあえて違いを強調するなら、トゥルニエは、より個人的な取り組みを考えているが、ロイドジョーンズは、教会と医療の関係 (区別と協働)、教会がなすべきことをまず取り上げていると言えるだろう。

E. 本書も、聖書 (福音) と医療について多くのことを学ぶことのできる有益な書である。時代的にはやや古いが、トゥルニエの『聖書と医学』と合わせて読んでいただくと、よいのではないか。

5. James Woodward, *Encountering Illness: Voices in Pastoral and Theological Perspective* (London: SCM Press, 1995)

A. 著者 (1961-) は、イギリスの実践神学の専門家のひとりである。現在は、アングリカンの St Mary's church の牧師、Lady Katherine Leveson 基金のリーダーである。またカーディフ大学の実践神学の名誉研究員でもある。最近では、ステフィン・パッティソン (Stephen Pattison) とジョン・パットン (John Patton) とともに、*The Blackwell Reader in Pastoral and Practical Theology* (Oxford: Blackwell Publishing, 2000) の編集や、*Befriending Death* (SPCK, 2005) を著している。

B. 本書は、『病氣』とは、人々が考えるかもしれない、単一で正確に定義づけられるような実体ではない (1 頁) ことに基づき、経験と伝統、実践と理論を、ダイナミックに、またホリスティックにまとめ上げようとするものであ